1　大砲と国旗と勲章をもったユダヤ人国家？

イスラエル国が実際に創設されるまで、パレスティナにおける未来のユダヤ共同体をどのように作り上げるかという点に関して、シオニズム運動の内部では意見が分かれていた。自立的国家形態というヴィジョンが満場一致で認められたわけではなかった。ブーバーはシオニズム運動のなかでも、政治的自立という目標に不信の念を抱いてそれに反対していた陣営の重要な代表者だったが、何よりもそれは、このことが、第一次世界大戦中に生じたような傲慢で狭隘なナショナリズムの発展を助長するのではないかとの憂慮に発してのことだった。第一次世界大戦は、ヨーロッパの多くの知識人たちにあってもそうだったように、ブーバーのなかにも、ナショナリズムに対する深い嫌悪を植え付けた。名状し難い悲惨を伴った長期の戦闘のなかで、ブーバーのように、当初は愛国的熱狂をもって戦争アピールを迎えた知識人たちのうち、戦争を非難し、戦争の狂気を近視眼的で無制限な民族（ナツィオナール）＝国民的自負ならびに、自民族（ナツィ）＝国民（オーン）の利害を神聖で道徳的に非難しえないものとみなす「聖なる利己主義」に帰すに至った者たちの数は次第に増加していった。反戦と反ナショナリズムの最も強力な表現のひとつはシュテファン・ツヴァイクの戯曲『エレミア』で、この戯曲は一九一七年、戦争が山場を迎えた時に発表された。[1] ツヴァイクの目には、破格の成功を収めたこの戯曲は預言的悲劇、言ってみればユダヤ民族（フォルク）を謳う叙事詩であった。[2] 永遠の敗者として迫害されながらも、みずからの運命を新たなエルサレムの源泉へと転じたユダヤ民族（フォルク）の叙事詩。彼らの運命は、政治的で民族（ナツィオナール）＝国民的な実存を超えて、兄弟的友愛、相互の寛容、万人に開かれた啓蒙精神の徴しのもとに置かれた生命の泉と化すのだ。以下に続く断片は、一九一八年一月付のツヴァイクの書簡[3]へのブーバーの返信である。この書簡のなかでツヴァイクは、戦争がもたらした覚醒的経験を前にして、シオニストたちは自分の戯曲のメッセージのなかにユダヤ教の真の理想を認めたのか、それとも、ツヴァイクの辛辣な言い回しを援用するなら、戦争は「大砲と国旗と勲章をもったユダヤ人国家への危険な夢」からシオニストたちを目覚めさせたのかと問うている。「夢が現実のなかで実現される危険が増せば増すほど」、自分はより決然と「ディアスポラという痛苦な観

念を愛し、ユダヤ的安寧よりもユダヤ的運命を好むようになる」とツヴァイクは打ち明けている。ツヴァイクは雄弁な問いを提起している。「転換を蒙った運命でないとしたら、ひとつの民族とは何でしょうか。パレスティナが終着点であり、円環の閉じるところであり、ヨーロッパと世界を震撼させた運動の終末であるとは。もしそうなら、それは（……）悲劇的な失望でありましょう（……）。」

ツヴァイクによるディアスポラの肯定への返答として、ブーバーは、ナショナリズムに対するみずからの不信感を表明するのみならず、シオニズムと自分との連帯のあり方を解説し、更には、シオニストたちの努力の恐るべき両義性を認めている――もっとも、ここにいう両義性は、ユダヤ教が肉体のない精神的存在から具体的で生きた共同体と化すべきであるなら、創造的な挑戦と解されねばならないだろう。ツヴァイク宛ての手紙を書いたのと同じ日、ブーバーは、友人でシオニストの同志でもあるシュムエル・フーゴー・ベルクマン（チェコのユダヤ系哲学者で、一九二〇年にパレスティナに移住した）にやはり手紙で危惧の念を打ち明けている。もしかすると、シオニズムはそう遠くない将来、極めつきのナショナリズムの水中に沈没してしまうのではないだろうか、と。けれどもブーバーは、個人的にはベルクマン宛ての書簡（この書簡もここに再録されている）を、シオニズムの内部に存するこの傾向との自身の闘いを新たに引き受けるとの固い決意をもって締め括っている。

（1）シュテファン・ツヴァイクの『エレミア』は九場の韻文劇でライプツィヒで一九一八年に出版された。

（2）この点については、ツヴァイクの『昨日の世界』（*Die Welt von gestern*, Stockholm, 1947, S. 290–293）を参照。

（3）この点については、マルティン・ブーバーの『七〇年間の往復書簡』（*Briefwechsel aus sieben Jahrzehnten*, Hg. Grete Schaeder, Heidelberg, 1972, I, S. 524f.）を参照。

シュテファン・ツヴァイクから マルティン・ブーバーへ

日付記載なし

（……）拙著は数奇な運命に委ねられました。出版社は何の広告もしませんでしたし、戯曲の上演もまだなのに、今日までに五千部以上売れたのです。これは描かれた時代のせいでしょうか、それともそこで物語られたことによるのでしょうか。いずれにしましても、これは私の作品のなかでも最も嘘偽りがなく、最も重要なもので、最も高い意味で自分にとって不可欠と感じる唯一の作品です。私はあなたと一度ぜひお話ししたかった、私の作品があなたの民族＝国民的サークルのなかでどのように作用しているかを知るために。私の作品は信仰告白として受け止められているのでしょうか、それとも、シオニズムの理念の否定として受け止められているのでしょうか。というのも、この点について私の考えには一点の曇りもないのですが、夢が――それも大砲と国旗と勲章をもったユダヤ人国家への危険な夢が現実のなかで実現される危険が増せば増すほど、私はディアスポラという痛苦な観念を愛し、ユダヤ的安寧よりもユダヤ的運命を好む決心をしているからです。安寧と満足がこの民族にとって価値あるものであったことは一度もなく、この民族は圧迫のうちにのみ自分自身の力を見出し、四散のうちにその統一を見出しました。一緒に集まったとしても、この民族はおのずと四散してしまうでしょう。転換を蒙った運命でないとしたら、ひとつの民族＝国民とは何でしょうか。また、ある民族＝国民がその運命から逃れるとき、この民族＝国民の何がなおも残るというのでしょうか。パレスティナが終着点であり、円環の閉じるところであり、ヨーロッパと世界を震撼させた運動の終末であるとは。もしそうなら、それはこれまで繰り返されてきたことと同様に悲劇的な失望でありましょう（……）。

マルティン・ブーバーから シュテファン・ツヴァイクへ

一九一八年二月四日

（……）今日はただこのことだけを申し上げたいのです。「大砲と国旗と勲章をもったユダヤ人国家」なるものについては、たとえそれが夢であるとしても、私はそれをまったく知らないのです。これから起こることは、ユダヤ人国家を創る者たちに懸かっているのであって、まさにそれゆえ、人間と人間性について私と同じ考えをもった人々は、ひとつの共同体を建設することが今またしても人間の手に委ねられたところでは、決定的な仕方で協力しなければなりません。あなたの歴史的な推論を、古き血筋からここで生まれるはずの新しい民族にあてはめることが私にはできません。ユダヤ人のパレスティナが、これまで精神性のなかにしか存在しなかった運動の終着点であるとしても、それはまた、精神を現実化させる運動の始まりでもあるでしょう。この運動は世界全体を震撼させはしたが、精神の領域でしか正当ではなかった、とあなたは仰しゃいました。この領域を踏み越えた時、それが何を産み出すかを、トロ

ツキーの例は私に示してくれます。すなわち、現実化が成功しないのは、理念が教説のなかでのみ生きていて、方法のなかでは生きていないからなのです。この点からこそ出発しなければなりません。いずれにしても、私は、これ以上ディアスポラに耐えることよりも、新たなものへ向けての恐るべき冒険に加わることのほうを好みますし、この冒険のうちに、「安寧」よりもむしろ一連の大きな犠牲を認めます。ディアスポラはというと、美しくも痛苦な豊饒さをそれがいかに伴っていようとも、この運動の各々を培っている糧を内的腐敗に委ねてしまうのです。それに私には、悲劇的ではないが恒常的で先の見通しのない堕落よりも、悲劇的な失望のほうが好ましいのです。

マルティン・ブーバーから
フーゴー・ベルクマンへ

ヘッペンハイム、一九一八年二月三―四

（……）何日か前日私は、パレスティナでこれから何が起こるかについて、〔ヴィクトール・〕ヤコブソン博士[1]と話し合ったのですが、話し合いが終わった時、私は憂鬱に近い感情に浸されていました。「われわれはできるだけ早く、どんな手段を用いても、かの土地での多数派とならねばならない」――心臓が凍りつくような議論です。同じ水準に立ちながら、それに何と答えることができるでしょう。シオニズムの指導者たちの大部分が（そしてまた、おそらくは彼らに従う者たちの大部分も）今日、まったく放埒なナショナリスト（ヨーロッパ型の）であり、帝国主義者であり、無意識的な金儲け主義者にして利益崇拝者であるということを、われわれは見誤ってはなりません。彼らは復活を語り、事業を思い描いている。われわれが権威ある反対勢力を立ち上げるのに成功しなければ、運動の魂は腐敗してしまうでしょう。おそらくは永久に。とにかく私としては、反対勢力立ち上げの方向に踏み込んでいくことを決意しています。たとえそれで私の人生設計が損なわれるとしても、です。（……）

（1）ヴィクトール・ヤコブソン（一八六九―一九三五）は外交官で、シオニズム運動に係る傑出した人物であった。当時、彼はシオニズム世界会議の執行委員会の一員だった。

2　決断に先立って

第一次世界大戦を終結させた休戦協定とともに、西欧諸国のあいだの連合は、中東支配をめぐっての熾烈な競争ゆえに著しく損なわれた。たしかに、西欧諸国の帝国主義的動機は、連合国が表向き標榜している道徳的理想主義と激しく矛盾していた。連合国はたとえば、ドイツならびに中欧諸国に対するみずからの闘いを平和のための戦争と民族（ナツィオナール）＝国民的自治の原則の擁護として褒め称えている。連合国の帝国主義的利害と民族（ナツィオナール）＝国民的自治の原則を一体化させる公式は、一九一九年一月にパリで召集された講和会議のなかで練り上げられた。敗れた中欧諸国の領土や植民地から生まれるはずの新たな諸国家を徐々に自治へと導くための信任ないし委任を西欧列強に授けるであろう国際連盟が創設されねばならなかったのだ。

かつてオスマントルコ帝国の一部だったパレスティナの運命については、パリ講和会議のあいだ、長時間の討議が交わされた。アラブ人もシオニストも代表団を派遣し、覚書を会議に提出するよう要請された。シオニズム機関の代表は、一九一九年の二月末から三月初めのあいだに会議に姿を現したが、人々は彼らの話に好意的に、また注意深く耳を傾けた。この友好的な応対のうちに、シオニズム運動は大いに希望に満ちた始まりを見出したが、会議はこの時期にはいかなる決定も下さなかった。一九二〇年四月になってようやく、連合国はサンレモで、パレスティナを大英帝国に委任統治させることで意見の一致を見たのだが、その際、明確な条件が付された。一九一七年一一月のバルフォア宣言でみずからに課した責務[1]を、イギリスは遂行しなければならないという条件が。

以下の論文は最初『ユダヤ人』（ディア・ユーデ）――一九一六年にブーバーが創刊し、以来彼が編集に携った雑誌――に掲載されたものだが、そのなかでブーバーは、自分はパリ講和会議のヴェールで覆われた帝国主義的動機をはっきり認識していると仄めかしている。連合国のスローガンや道徳的振る舞いに欺かれてはならないと、彼はシオニストの同志たちに警告している。帝国主義との同盟は、いかにそれが人間的なものを装うとしても、シオニズムの道徳的な根拠と性質を損ないかねない。アラブ民族（フォルク）との本物の同盟が成立したときにのみ、シオニズムは道徳的にも政治的にも生き延び